



Title	ソネットに見える繰り返しのレトリック再考 : ”when~, then~”の繰り返しを中心に
Author(s)	渡辺, 秀樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85058
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ソネットに見える繰り返しのレトリック再考 “when~then~”の繰り返しを中心に¹

渡辺 秀樹

§ *The Sonnets* に見られる様々なレベルでの繰り返しとその効果

名詞・形容詞・動詞・副詞という実詞が1編中で3回、4回繰り返されるのは反義語との対照とともに *The Sonnets* の常套レトリックである。例えば *young, youth* はしばしば *old, age, decrepit* などと近接して現れ、*summer* が出れば他の季節名も出る。ソネット14行の4部構成で、第1四行連句から第3連句までが同じ主題の変奏を繰り返して、結句2行がそれをまとめたり逆転したりというもっと大きな構造的な繰り返しもあるし、第153篇で典型的に見られるように、4部全てに *fire* が現れ (3, 5, 9, 14) これが *key word* となっている。第99篇では、第2行で “*sweet thief*” “*thy sweet*” と2回出た *sweet* は、最終行で “*sweet or colour*” 「色香」つまり「優れた心持ちと容姿」とまとめられて *epanalepsis* を構成し、第2行、7行、10行、最終行に繰り返される動詞 *stolen-steal* と平行して詩の主題を提示している。ソネット全154編に見られる「繰り返し表現」のレトリック考察に先立ち、研究者や愛読者に周知の繰り返しの例を、異なる3つのレベルで見ておく。

音韻の繰り返しの例では母音韻や類音列挙もあるが、ここでは頭韻の効果的使用例を見たい。Shakespeare は行中 (*intra-linear*) はもちろん行間頭韻 (*inter-linear alliteration*) が特徴で、これが単なる音合わせではなく、主題となる数個の語句が同音で始まり、または主題となる語句が浮かぶように (*hypogram*) 頭韻を用いることが多い。明らかな例は第9篇である (以下の引用では *Sonnet* 番号はローマ数字で示し、繰り返されている語句や議論の対象とする語は太字か下線で強調する)。

IX.²

Is it for fear to **wet a widow's** eye
That thou consum'st thy self in single life?
Ah, if thou issueless shalt hap to die
The **world** will **wail** thee like a makeless **wife**.
The **world** will be thy **widow** and still **weep**
That thou no form of thee hast left behind,
When every private **widow** well may keep,
By children's eyes, her husband's shape in mind.
Look what an unthrift in the **world** doth spend
Shifts but his place, for still the **world** enjoys it;
But beauty's **waste** hath in the **world** an end,
And kept unused the user so destroys it:
No love toward others in that bosom sits
That on himself such murd'rous shame commits.

一読、顕著な語頭<w>音に気づくが、これは第1四行連句が枠となる第1行と第4行で、そしてその2行のみで<w>音を5回繰り返して決めた、全体を支配する基調音である。14行中に名詞 *world* と *widow* がそれぞれ5回と3回繰り返されて、「この世」が「寡婦」となるという主張を

¹ 本論文の執筆には、以下の科研費2件の補助を受けている。基盤研究(C)1「英詩メタファーの構造と歴史 II」(研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子)、基盤研究(C)1「英語メタファーの認知詩学 II」(研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹)。

² *The Sonnets* の現代校訂テキストは、校訂者それぞれの解釈を反映して句読点にかなりの相違が見られ、読者の解釈に影響する。この第9篇では Vendler (1997) や 嶺 (1974) は3行目冒頭を “Ah!” と感嘆符を付けているが、川西 (1971)、Duncan-Jones (1997)、Burrow (2002) は “Ah,” としている。1609年版ではセミコロン “Ah;” である。次の第135篇では1609年版の “*Will*” という大文字イタリック表記が現代校訂版では大文字表記にされ、他の *will* は小文字で印刷されているので、読者は初めから固有名・名前は大文字表記の方、小文字の方は助動詞か「意志・欲望」の意の名詞の解釈に拘束される。行末のコロン、セミコロン、ピリオドの差が統語的・構造的解釈を左右するのだが、本論ではその問題にも少しだけ立ち入る。以下の *Sonnets* からの引用は Burrow の句読点と大文字小文字表記に従う。

定めている。³ この基調音を、あるいは通奏低音を、ふたつの名詞に絡む主要動詞 *wet, wail, weep, waste* が全て <w>音を繰り返して、ユニゾンのように倍加する効果をあげている。本詩の主張「美青年が独身を貫けば、美しい子を産んで幸せになる女性が寡婦となるばかりか、青年の美が受け継がれずに消えて、この世自体が寡婦となる」に含まれる青年と「妻」になるべき女性「寡婦」の関係と、青年と「この世」というより大きな枠組み、これらが全て <w>音で始まるのである。名詞 *world* は 5 回、*widow* が 3 回、*wife* は 1 回という頻度も、「妻」に成るはずの女性の嘆きよりも青年の美を失うことになる「この世」の嘆きが大きいことを数値で印象づけているようだ。

このような頭韻に対して語末の音の意図的な繰り返しはないのだろうか。私は次の第 37 篇をその非常に美しい例として示したい。

XXXVII.

As a decrepit father takes delight
To see his active child do deeds of **youth**,
So I, made lame by Fortune's dearest spite,
Take all my comfort of thy **worth** and **truth**.
For whether **beauty**, **birth**, or **wealth**, or wit,
Or any of these all, or all, or more,
Entitled in thy parts, do crowned sit,
I make my love engrafted to this store.
So then I am not lame, poor, nor despised,
Whilst that this shadow doth such substance give
That I in thy abundance am sufficed,
And by a part of all thy glory live.
Look what is best, that best I wish in thee;
This wish I have, then ten times happy me.

第 1 連では 2 行目と 4 行目に *youth* と *truth* が脚韻を踏んで、「若い」青年の「誠実」の美点をまず強調するが、その第 4 行には前に *worth* 「真価=merit」が *thy worth and truth* と binominal の対句で現れており、これが第 2 連でさらに列挙される美点を先行してまとめているようだ。⁴ 太字で示した 5 語は語尾 -th を共有する抽象名詞で、青年の美点を子音韻 (consonance) で関連付けており、さらには第 5 行で “*beauty, birth, or wealth, or wit,*” と *beauty* と *birth, wealth* と *wit* が頭韻で結ばれてもいる。これら首尾の同音連結により、列挙された美質がさも本質的に繋がりがあのかのように示す効果をあげていると思う。第 6 行以降にはこの語尾 -th が第 10 行の 3 人称単数 *doth* 以外には出ないことも指摘したい。下にこれら 7 語の関係を 2 様に図示しよう。

youth を青年の言い換えと取る場合						
		youth				青年の言い換え
		thy worth				価値
birth	beauty	wealth	truth	wit		美点
youth を青年の美点の 1 つと取る場合						
		thy worth				君の価値
youth	truth	birth	beauty	wealth		美点

³ Duncan-Jones (1997, p. 128) は “The alliteration has a somewhat theatrical effect of emphasis.” という注を付けている。また Vendler (1997, p. 84) は 1609 年版での綴り <widow> の鏡面構造 (w-i-d-d-o-w) を重視して、<w> は double-u であることから、Shakespeare は本篇で <w><u>音を語頭、語中、語尾にちりばめていると指摘している。

⁴ 川西 (1971, p. 103) は第 4 行の *truth* について「ソネット集の中で *true, truth* はそれぞれの場合に応じて *sincerity, loyalty, genuineness, uprightness, closeness to an ideal pattern* など様々の意味を持つことに注意」と述べている。また大場 (2018, p. 89) は「**5. Birth, wealth** この「比喩的」表現を “the fair youth” 「実体」と安易に結びつけてはなるまい」と警告している。Duncan-Jones (p. 184) “**4 worth and truth** Since [Sonnets] 33-6 have dealt with the young man's betrayal of his friend, his sensual fault (35.9) and blots (36. 3), the celebration here of his *worth and truth* must entail an appropriation of the young man's weakness so effective that he can now be regarded as faultless.” も参照。

語の繰り返しで有名なのは Will Sonnets と呼ばれる第 135 篇、136 篇での will の列挙である。

CXXXV.

Whoever hath her wish, thou hast thy **Will**,
And **Will** to boot, and **Will** in over-plus;
More than enough am I that vexed thee still,
To thy sweet **will** making addition thus.
Wilt thou, whose **will** is large and spacious,
Not once vouchsafe to hide my **will** in thine?
Shall **will** in others seem right gracious,
And in my **will** no fair acceptance shine?
The sea, all water, yet receives rain still,
And in abundance addeth to his store;
So thou, being rich in **Will**, add to thy **Will**
One **will** of mine, to make thy large **Will** more.
Let 'no' unkind, no fair beseechers kill:
Think all but one, and me in that one **Will**.

CXXXVI.

If thy soul check thee that I come so near,
Swear to thy blind soul that I was thy **Will**,
And **will**, thy soul knows, is admitted there:
Thus far for love my love-suit, sweet, fulfil.
Will will fulfil the treasure of thy love,
Ay, fill it full with **wills**, and my **will** one.
In things of great receipt with ease we prove
Among a number one is reckoned none;
Then in the number let me pass untold,
Though in thy store's account I one must be;
For nothing hold me, so it please thee hold
That nothing me, a something sweet to thee.
Make but my name thy love, and love that still,
And then thou lov'st me for my name is **Will**.

この 2 編では will がそれぞれ 14 回、7 回、William の愛称、「意志・欲望」の意の名詞、ここから「性器」のほのめかしで、また助動詞として出現する。この will の繰り返しの音効果は、第 135 番では still, kill による脚韻によって強められているが、第 136 番では一歩進んで 4-6 行の full, fill、その複合形による行中の繰り返しで強化されており、5-6 行と 13-14 行での love の 6 度の使用とともに、繰り返しの重層が達成されている。これらは音韻的には面白い詩ではあるが、主張されている深い愛欲は、執拗な繰り返しと奇想によって、かえって軽薄なものに感じられる。⁵ では第 19 篇の（擬人化された）時の神への呼びかけはどうであろうか。

XIX.

Devouring Time, blunt thou the lion's paws,
And make the earth devour her own sweet brood,
Pluck the keen teeth from the fierce tiger's jaws,
And burn the long-lived phoenix in her blood,
Make glad and sorry seasons as thou fleet'st,
And do whate'er thou wilt, swift-footed Time,
To the wide world and all her fading sweets:
But I forbid thee one most heinous crime,
O! carve not with thy hours my love's fair brow,

⁵ Duncan-Jones (p. 386) も “**5 Will will fulfil** ‘William/sexual desire will gratify’: the threefold -ill sound creates a comic or satirical effect, as well as hinting at the ‘ill’ or evil nature of what is proposed.” と真剣さの欠如を感じている。

Nor draw no lines there with thine antique pen.
Him in thy course untainted do allow
For beauty's pattern to succeeding men.

Yet, do thy worst, old Time: despite thy wrong,
My love shall in my verse ever live young.

本篇では3つの四行連句と結尾の2行の4部構成はとらずに3部構成になっている（Burrowの句読・校訂では）。7行目までの内容「勇きも美しきも喰らいつくす時」に対して、8行から12行で「しかし、私の愛する美青年の額には皺を刻まないでくれ」と懇願する詩人が、一転、最終2行で「どんなものでも滅ぼしてしまう時、その暴虐をほしいままにせよ、しかし私の詩の中に刻まれた青年の美は、詩と共に永遠に残る」と、自らの詩の永遠性を青年の美に託して歌い上げているのだ。第1行、第6行、第13行で呼びかけられた Time には形容辞が付いており、このヴァリエーションが本詩の眼目で、その主張を強調しているのである（1609年版では初めの2例は小文字表記の time で、最後が“ould Time”と擬人化を明示しているが、Burrow は3例とも大文字にしている）。用いられた形容辞は、例えば Joshua Poole, *English Parnassus* (1657, p.207) を見れば、ルネッサンス期の英詩の常套句であり、それ自体は Shakespeare の個性や才能を示すものではないが、順番が物を言う。⁶もし初め、あるいは2番目に“old Time”が出たらどうなったであろう。最終2行での“My love shall in my verse ever live young.”の形容詞 young との対比が曖昧にならないだろうか。他の篇でもしばしば反義語の近接した使用が見られるが、例えば30篇でも“And with old woes new wail my dear time's waste;”のように old と new を1行中で対比させている。最終連で「老いた時よ」と呼び掛けることで、何者をも老いさせ死なせる時に対して、「その青年の美と共に、私の詩は永遠に若いまま残る」との主張が鮮明になるのである。400年以上前に書かれた *The Sonnets* を今、筆者が論じていることが、この最終連の主張を証明している。次ぎの大森論文では第19篇を最後の yet の逆転効果から論じているので合わせ読みたい。⁷

同一語の繰り返しに異なる形容辞が付く例は他にも見える。第71篇では the world (3)「世間」、the vile world (4)「悪逆な世の中」、the wise world (13)「賢しきな人々」と名詞 world が異なる意味で3度繰り返されて、詩人が美青年に対して「私が死んだらすぐ忘れてくれ、私などと関わったということがあなたに対する世の評価を落とすから」という（偽の）懇願を強調している。

語の繰り返しが、詩中で連続する2語の繋ぎにより生じた音によって倍加された例は Helen Vendler (p.148) が挙げている。彼女は第26篇の第5行までに見える witness, wit, wit（太字部）の連続が、後続行の“show it”“bestow it” with, sweet（下線部）によって音読された時に、または視覚的に繰り返されていると指摘した。その指摘から思い至ったことを述べたい。

XXVI.

Lord of my love, to whom in vassalage
Thy merit hath my duty strongly knit,
To thee I send this written ambassage
To **witness** duty, not to show my **wit**;
Duty so great, which **wit** so poor as mine
May make seem bare, in wanting words to show it,
But that I hope some good conceit of thine
In thy soul's thought (all naked) will bestow it:

⁶ Poole は“Time”の項で、aged, eating, feathered, fleeting, flying, stealing, swift-winged, winged など「古い」「(空飛ぶ)速やかさ」「貪食」を意味する語を、アルファベット順ではなく任意に並べている。そのリストの中程にある devouring, swift-footed の連結表記は、Shakespeare のソネット第19篇での使用の写しであろう。

⁷ Duncan-Jones (p. 148) はこの“old Time”について“the poet acknowledges time's antiquity, with capitalization that may be authorial, but also, as he approaches his solution to the problem of time's power, feels able to address him colloquially as an 'old fellow'.”と最後の呼びかけで「親しみ」の意を old に込めていると見ている。私は“old boy”「やあ、おい君」などの呼びかけに通じると思い、*The Oxford English Dictionary* (on-line)で見出し語 old boy を見ると、初例は Shakespeare の同時代劇作家 Ben Jonson であった（“1602 B. Jonson *Poetaster* iii. iv. sig. F Thou shalt impart the wine, Old boy”）。このことから、やはり3度の呼びかけでの形容詞 old は、最後に来るべきである。

Till whatsoever star that guides my moving
Points on me graciously with fair aspect,
And puts apparel on my tottered loving
To show me worthy of thy sweet respect.

Then may I dare to boast how I do love thee;

Till then, not show my head where thou mayst prove me.

この第 26 篇では詩人は、第 1 四行連で「この詩は貴殿の臣下としての私の義務を示すために書くのであって、自分の機知・文才を示すためではない」と書いている。第 4 行で前後に振り分けられた動詞 witness と名詞 wit は第 2 行の knit との脚韻によって際立って、むしろ連結されており、これが、「反語的否認」(apophasis, depulsio) のレトリックで、自らの wit「機知・文才」について書くのであると述べてしまっている。ここのところを Vendler が “This showy nonshowing and not-as-yet showing” (p. 148) と書いているのは面白い。第 2 連では初めに “wit so poor” 「貴殿の美質を描写するだけの文才は私にはない」と言いながら、第 6 行と 8 行の脚韻部、つまり最も目立つ位置に “show it” と “bestow it” を置き、その it は wit の言い換えで最終弱音節に当たるのだが、直前の強勢のある動詞の <w> 音と連続して、音読の際には極めて明瞭に wit の音を響かせる。つまり第 1 連の挨拶・言明は虚となり、自らの wit を言い立てるのである。Vendler はここまで述べてはいないが、続けて第 10 行の with と第 12 行の sweet にも視覚的・聴覚的な wit の反響をみる。が、私はそこはとらない。むしろ第 6 行の “wanting words” によって構成される第 4 行からの行間頭韻 (interlinear alliteration) が、第 2 連への wit の持越し、言い立てを支えていると見る。

以上、同一音、同一実詞 (名詞・動詞) の繰り返し効果を見て来た。では機能語の繰り返しはどういうものだろうか。深刻な思いが伝わる等位接続詞 and の繰り返しは第 66 篇に見られる。

LXVI.

Tired with all these, for restful death I cry:

As to behold desert a beggar born,

And needy nothing trimm'd in jollity,

And purest faith unhappily forsworn,

And gilded honour shamefully misplaced,

And maiden virtue rudely strumpeted,

And right perfection wrongfully disgraced,

And strength by limping sway disabled

And art made tongue-tied by authority,

And folly, doctor-like, controlling skill,

And simple truth miscalled simplicity,

And captive good attending captain ill.

Tired with all these, from these would I be gone,

Save that, to die, I leave my love alone.

行頭で10回繰り返される (anaphora) and が列挙する世の不条理は、冒頭の “Tired with all these” で後方照応的 (cataphoric) に示され、結句第13行では前方照応的 (anaphoric) に再度まとめられて、これらが envelop pattern をなしてそれらを包み込み、あるいは隔語句反復 (epanalepsis) をなす指示の繰り返しにより指弾する形を取っている。⁸ そして行頭以外の位置のandの使用は、冒頭と末尾の2行も含めて周到に避けられていることを指摘せねばならない。

このソネットを読んだ時に私の頭に浮かんだのは『ロミオとジュリエット』の第1幕1場、恋の定義がオクシモロン表現で執拗に言い換えられる台詞である。日本の歌舞伎や落語でも「言い立て」という物の名前を列挙するレトリックがある。シェイクスピアの戯曲にも時折みられる言い立てのような列挙は、あまりに続くと、ひとつひとつの表現を味わう前に茫然としてしまい、軽薄感が生まれるのは避けられないだろう。で、深刻さと哀感・恐怖を高める列挙ならば、『リチャード三世』5幕3場、リチャードに殺された王族・貴族らの亡霊が次々と現れる様子、この行列

⁸ Duncan-Jones (p. 512) は “tired with all these” の繰り返しを epimone 「執拗な繰り返し」の例としている。

の長さが与える効果にも似ていようか。⁹ 本詩の *and* の多用について Vendler は「この*and*の連続は、舌がもつれたようで「雄弁」とはまるで言えない（中略）まるで仮面劇の役者が一人一人舞台を過ぎて行く時に、（詩の読者の）同時代人で似ている人の顔を思い浮かべた時にのみ、この詩が生き生きとしたものになるのだ」と述べているのは傾聴に値する。¹⁰

次節で論じるのは機能語の繰り返しで、同一接続詞が行頭に繰り返される事例を比較する。繰り返される語は4部構成（1-4, 5-8, 9-12, 13-14）の各連冒頭に典型的に現れることを確認しておく。例えば、疑問詞*why*が3度繰り返される第67篇では、第2四行連句冒頭の5行目と7行目、第3四行連句の冒頭9行目冒頭の*why*が2行、2行、4行の疑問文を導いている。

§ *when* と *then* の繰り返し

周知のとおり Shakespeare の *Sonnets* のほとんどが、第1四行連句から第3四行連句までの12行と、そこで述べられた内容をまとめる、ないし逆転させる最終二行の4部構成を取っている。154篇中で *when* の導く従属節と、それを受ける *then* が導く主節は各連の冒頭に現れることが多い。154篇中で *when* で始まるのは10篇あり（第2, 12, 15, 29, 30, 43, 64, 88, 106, 138編）、第1四行連と第2連の冒頭が *when-then* で呼応する単純な形式は第2編に見える。

II.

When forty winters shall besiege thy brow,
And dig deep trenches in thy beauty's field,
Thy youth's proud livery so gazed on now
Will be a tattered weed of small worth held:
Then, being asked **where** all thy beauty lies,
Where all the treasure of thy lusty days,
To say within thine own deep-sunken eyes
Were an all-eating shame, and thriftless praise.
How much more praise deserv'd thy beauty's use
If thou couldst answer 'This fair child of mine
Shall sum my count, and make my old excuse',
Proving his beauty by succession thine.
 This were to be new made **when** thou art old,
 And see thy blood warm **when** thou feel'st it cold.

第1四行連句の内容を受ける第2連が *then* で始まると、すぐに疑問詞 *where* の繰り返し “*Ubi sunt*” の変奏に引き継がれ、青年が老いて、消えてしまった美の在処が問われる、と「その時に」「我が子に引き継がれたのだよ」と言うことこそ、今の青年の美の証しとなるのだという主張が *when-then, where-where* の枠組みで提示されて、最終連の *when* 節の繰り返しで「あなたが老いた時」という時間設定が中心テーマであると再確認されるわけである。

さて、この構造は次にあげる第106編にも見られ、*when* と *then* がともに “*I see*” という主語と動詞を導いて平行構造をなし、第11行と13行の “*they looked*” と “*we... behold*” に視覚動詞のヴァリエーションで引き継がれている。この「私が～を見る時」という措辞は、後で見るように、第12篇、第15編あたりから現れて、第64篇で完了形の3度の繰り返しとなって最高度に達する。第1行の “*wasted time*” に注意しておこう。

CVI.

When in the chronicle of wasted time
I see descriptions of the fairest wights,
And beauty making beautiful old rhyme
In praise of ladies dead, and lovely knights;
Then in the blazon of sweet beauty's best,

⁹ 大場 (p. 148) は「*Lear* 3.2, 嵐の場を締めくくる Fool の ‘prophecy’ の戯れ歌を思い浮かべる」と言う。

¹⁰ “The sonnet ‘comes alive’ only if readers ‘animate’ it by reflecting, as each character in the masque passes by, on the contemporary face they would attach to each personage.” (*The Art of Shakespeare's Sonnets*. 1997, p. 310)

Of hand, of foot, of lip, of eye, of brow,
I see their antique pen would have expressed
 Even such a beauty as you master now.
 So all their praises are but prophecies
 Of this our time, all you prefiguring,
 And, for they looked but with divining eyes,
 They had not skill enough your worth to sing:
 For we, which now behold these present days,
 Have eyes to wonder, but lack tongues to praise.

この第1四行連句と第2連句の構造が一段階複雑になったものが、第2連冒頭にwhenが繰り返されて2つの四行連句従属節が第3連句冒頭のthenに引き継がれる第15編、第2第3四行連句冒頭にthenが繰り返される第30編である。

XV.

When I consider every thing that grows
 Holds in perfection but a little moment;
 That this huge stage presenteth naught but shows,
 Whereon the stars in secret influence comment;
When I perceive that men as plants increase,
 Cheered and checked even by the self-same sky,
 Vaunt in their youthful sap, at height decrease,
 And wear their brave state out of memory;
Then the conceit of this inconstant stay
 Sets you most rich in youth before my sight,
 Where wasteful time debateth with decay
 To change your day of youth to sullied night,
 And all in war with **Time** for love of you,
 As he takes from you, I engraft you new.

第15篇では第1連と第2連が4行ずつで形作る従属節を第3連の第9行 **Then** が主節で受けて、最終連での切れ目がなく、前半8行と後半6行の2部構成を成している。ここでは名詞 **time** が第11行と13行で繰り返されており、初めの方に wasteful という形容辞が付いているが1609年版、*Borrow* の校訂でも小文字表記であり、13行の **Time** は擬人化を明示した大文字表記であることを確認したい。第19篇の議論参照。

一見似ているが、さらに複雑な統語構造を示すのは第30篇である。

XXX.

When to the sessions of sweet silent thought
I summon up remembrance of things past,
I sigh the lack of many a thing I sought,
 And with old woes new wail my dear time's waste;
Then can I drown an eye (unused to flow)
 For precious friends hid in death's dateless night,
 And weep afresh love's long-since-cancelled woe,
 And moan th' expense of many a vanished sight;
Then can I grieve at grievances fore-gone,
 And heavily from woe to woe tell o'er
 The sad account of fore-bemoaned moan,
 Which I new pay as if not paid before.
 But if the while I think on thee (dear friend)
 All losses are restored and sorrows end.

ここでは後出の、より複雑な when と then の繰り返しに見られる統語的特徴が既に表れている。それは “When I consider...” “When I perceive...” や “When I summon up remembrance” “Then can I

drown an eye” “Then can I grieve” のように主語を揃えて、述語部分（動詞と目的語）をヴァリエーションで変化させる手法である。第 1 四行連句内では第 1-2 行の従属節を第 3-4 行の主節が“I sigh”で受けており、これが第 5 行 “Then can I drown an eye” と同じ主語 I に続く weep（第 7 行）、moan（第 8 行）、第 9 行 “Then can I grieve” に連なって、「溜息をつく」「涙を流す」「悲しむ」という悲哀のヴァリエーション表現を提示するが、第 2 四行連句と第 3 連が第 1 連の主節として並列・進行しているのか、第 3-4 行の内容の拡大的言い換えであるのか、読み方は定められない。この統語構造の曖昧・混乱は、数々の悲しみに思い巡らし、数え立てて沈み込む精神状態を写しているような効果がないだろうか。この似ている統語形式の第 15 編と 30 篇を並べて読めば、時（の神）Time に付く常套形容辞 waste(ful) が「何物をも荒廃させる・衰えさせる」の意味から「数々の悲哀で時を無駄に過ごしてしまった」という意味に変化していることが掴める。この第 30 篇については次の大森論で、その逆転のレトリックが論じられているので参照されたい。

次の第 43 篇では when が行頭で 3 回、行中で 2 回出るが、「昼と夜、いずれにおいて詩人は美青年の姿を鮮明に見ることが出来るか」という時に関わる問に、時の副詞 when が多用されていることを指摘したい。「昼夜」の言い換えとして [ait] の母音韻で結ばれた名詞・形容詞 bright, light, night, sight(less) が 10 回繰り返されて、when の繰り返しと交互に響くのが本詩の音韻効果である。

XLIII.

When most I wink, **then** do mine eyes best see,
For all the day they view things unrespected,
But **when** I sleep, in dreams they look on thee,
And darkly bright, are bright in dark directed.
Then thou, whose shadow shadows doth make bright,
How would thy shadow's form form happy show,
To the clear day with thy much clearer light,
When to unseeing eyes thy shade shines so?
How would (I say) mine eyes be blessed made
By looking on thee in the living day,
When in dead night thy fair imperfect shade
Through heavy sleep on sightless eyes doth stay?
All days are nights to see till I see thee,
And nights bright days **when** dreams do show thee me.

次に見るのは第 1 行、第 3 行、第 5 行で when が導く従属節が 3 度繰り返されて、それらを受ける Then の主節が第 3 四行連句まで持ち越された例で、かつ最終行にまた when が出て来るのだが、その遅延と繰り返しの効果はいかなるものであろうか。

XII.

When I do count the clock that tells the **time**,
And see the brave day sunk in hideous night;
When I behold the violet past prime,
And sable curls, all silvered o'er with white;
When lofty trees I see barren of leaves,
Which erst from heat did canopy the herd,
And summer's green all girded up in sheaves,
Borne on the bier with white and bristly beard,
Then of thy beauty do I question make,
That thou among the wastes of time must go,
Since sweets and beauties do themselves forsake,
And die as fast as they see others grow,
And nothing 'gainst **Time's** scythe can make defence
Save breed to brave him **when** he takes thee hence.

この第 12 篇は最後に論じる第 64 番とともに、“when-then” の繰り返しパターンが「時による破壊と変化」という主題と結びついて、154 篇中で最高度に展開されていると私は見る。まず注目すべ

きは、第1行で聞こえる“count the clock that tells the time”の[k]音3回、[t]音4回、時計の ticktack 音の模写で、これは Vendler も大場も指摘している。ここを導く when 以下の主語 I に続く動詞 “I do count” は、“and (I) see” “I behold” “I see” と聴覚から視覚へ移行する。この “When I see” は第15番、第30番と同じ。3度繰り返される名詞 time は第1行では、「(時計の刻む) 時刻」、第10行では「時間」、第13行で「時の神」として擬人化され、詩人の格闘の相手として立ち上がるのだ。この流れは typographical の形でも示されており、1609年版では、小文字、小文字、大文字として印刷しており、校訂者 Burrow はその通りにしている。

最終行半ばで when が再出するのは前の第43篇と同じである。第43篇では「昼と夜、いずれにおいて私は貴方の姿をはっきり見るのか」という問いと自答に、最終的に結論づけるのがこの最終節となっている。第12篇の方では、あたかも詩人の愛する青年の生涯の最後の時と一致するが如く、最終行の最終節に現れている。両者とも、14行中で when が先行して何度も鳴り響くことにより、極めて繊細でかつ持続的な愛情の確認、その音表象となっていないだろうか。

そして when と then が各四行連句の初めに繰り返されて variation による変奏を成す高度の構成を持つのが第64編である。この詩で then が用いられないのは何故か。

LXIV.

When I have seen by Time's fell hand defaced

The rich proud cost of outworn buried age,

When sometime lofty towers I see down razed

And brass eternal slave to mortal rage;

When I have seen the hungry ocean gain

Advantage on the kingdom of the shore,

And the firm soil win of the wat'ry main,

Increasing store with loss, and loss with store;

When I have seen such interchange of state,

Or state itself confounded to decay,

Ruin hath taught me thus to ruminate,

That **Time** will come and take my love away.

This thought is as a death which cannot choose

But weep to have that which it fears to lose.

この第64篇は、第12篇と全く同じく、第1行、第3行、第5行にwhenが3度繰り返されているが、第12篇でそれら3個の従属節を9行目のthenが受けて構造を成している一方、第64篇では再び切れ目の9行目にwhenが繰り返されて、thenが導くはずの主節、つまり主意は第11～12行 “Ruin hath taught me thus to ruminate/ That Time will come and take my love away.”であることは、第1行が “When I have seen by Time's fell hand defaced” で始まって、この12行の冒頭と結尾に置かれた擬人化されたTimeがepanalepsisの構造で主題として強調されていることから明白である。この「時(による諸々の変化と消滅)」を印象付けるために「時」の接続詞whenが4回繰り返されているのは偶然ではない。先に見た第12篇では when に続く動詞が現在形で“I do count” “I behold” “I see”と言い換えられていたが、第64篇ではそのうちの動詞 see が完了形で3度繰り返されて、動詞部の言い換えと繰り返しの対照をなしている。さらには主題となる「時」time は第12篇では第1行、第10行、第13行に繰り返され、第64篇では第1行と第12行に現れて、ともに「包み込み構造」(envelop pattern) ないし「隔語句反復」(epanalepsis) と言うべきパタンで強調されている。このレトリックの存在から、その主題とレトリックの変奏と言えるだろう。冒頭の “Time's fell hand” のイメージは第12行の “take my love away” に繋がって、「時の神の残酷な手によって、私の愛する人が連れ去られる時」という言辞を形作る。で、初めの疑問に戻るが、これらのwhenに導かれた従属節は、結果を示す主節に引き取られず、宙ぶらりんとなっている。それは最終2行の内容「その時のことを考えただけで死んだも同然となる私は、失いたくなくて泣くばかりである」で知れる。どうなるか全くわからないから、thenで引き取って述べるできないのである。

第12篇との関連で述べなければならないことは1609年版での印刷表記である。先に述べた Burrow 版のように、第12篇第13行は “Times sieth”[ママ]「時の大鎌」と大文字表記であるが、第64篇第1行では “times fell hand” と小文字表記になっている。ここを多くの校訂者は大文字表記にし

て擬人化を明示している。比較すべきは同想「時の破壊」のテーマを歌った第60篇で、こちらでは擬人化された「時」は第8行と9行に登場し、第8行では行頭 And の後で小文字表記、第9行では行頭で大文字になっている。第60篇では第12行に“his sieth to mow”、第14行に“his cruell hand”と「時の神の大鎌」と「時の神の残酷な手」の両方が揃っているが、もちろんhisは小文字表記。で、結論であるが、第12篇の“Time’s scythe”は、時の神の持ち物 (attribute) と共起しているから擬人化、大文字表記が当然であり、「時の手」と身体部位名が出れば、やはり擬人化を明示するため、現代校訂版では大文字表記が適当であろう。上で示した解釈も、大文字表記の Time が第1行と第12行に出て epanalepsis を構成する意味を説明している。¹¹

このように接続詞 when と then が、特に 4 部構成の各部冒頭に繰り返される篇を続けて読んでみれば、名詞 time が頻出すること、「時の神」「時間」「時代」「世相」「時刻」のように 1 篇中で異なる意味で用いられていること、他の実詞も並行して繰り返されている場合が多いこと、waste の概念が顕著であること (XII, XV, XXX, CIV)、「私が～を見る時」という措辞が共通していること (XII, LXIV, CVI) がわかる。時の接続詞・疑問詞 when や副詞 then が多用されるのが「時」time を歌う詩であることは、もっともな事だろう。

結論であるが、本論の引用が基づく版の校訂者 Colin Burrow が『ソネット集研究ガイド』(2007) に寄せた論文から、まず引用する。

“The sonnets invite close inward attention. Their language seems to slip in sense from line to line and from phrase to phrase: probably if you do not find at least four different currents of meaning in each line you have missed something, and even if you find more than four you probably still have missed something.” (p.145)

ここを初めて読んだ時には Burrow がその後ではっきりと書いていない「各行の意味の 4 種の流れ」とは何を指すのかわからなかった。大森文子教授の示唆で、Burrow がこの引用部の直前に自分を含めて最近の 4 名の校訂者とその版を挙げていることから、「校訂者は自らの読みを込めたソネット集を校訂提供している」その、それぞれの読み方を指すらしいことがわかった。¹² しかし私は、ここまで繰り返しの諸相を再考して来て、その言葉を自分流に解釈し、ソネット集では、1) 音韻による繰り返し、2) 語による繰り返し、3) 文法構造・措辞による繰り返しが並行・錯綜し、4) これらは何度も現れて幾つかの主題を繰り返し、強調しているのである、と考える便としたい。

¹¹ 第 60 篇の “cruel hand” と第 12 篇の “fell hand” を見て思い出されるのは、戯曲 *Twelfth Night* の 1 幕 1 場で Orsino 公爵が「Olivia 姫を一目見てから、残酷な獵犬が牡鹿 (hart) を追い詰めるように、私の心 (heart) は欲望に駆り立てられている」との台詞で、“That instant was I turned into a hart, And my desires, like fell and cruel hounds, E’er since pursue me.” (Dover Wilson 版より引用) と類義形容詞 fell と cruel が binominal で使われることである。

¹² 大森教授の示唆（読み）は校訂本に対する批評眼を持つために有益であるので、ここに引用する。

「これは *Editing the Sonnets* というタイトルがついたチャプターで、「シェイクスピアの Sonnets が、編者の手にかかることにより、『編者の sonnets』になる」という観点から、現代の Editor の名前を 4 名 (Kerrigan, Vendler, Burrow, Duncan-Jones) 挙げ、目の前のテキストに対する critical attitude を読者に勧めており、「Editor というものはテキストに対して恐ろしいことをするもので、それが彼らの仕事だ」(Editors do dreadful things to texts. That is their job.) と述べ、「私たちは彼らが principle にのっとってその仕事をしたことを期待し、テキストに何をしたのかを明らかにしてほしいと期待する」というのが直前の文脈です。そこから考えたのは、Burrow は編者がテキストに加える変更によってテキスト自体の意味が変わる、読者はそれを意識しなければならないということを言おうとしており、...probably if you do not find at least four different currents of meaning in each line you have missed something, and even if you find more than four you probably still have missed something. というのは、「読者は（現代は上記のように少なくとも編者が 4 名はいるのだから、それぞれの）少なくとも異なる 4 つの意味の流れを把握することができなければ、何かを見落としていることになるのであり、(4 名分の) 4 通りの意味以上の異なる意味を見つけれたととしても、それでもおそらくまだ何かを見落としているのだ。」ということでしょう。」

参考文献

- Allot, Robert, 1600. *England's Parnassus*. (1970) Scoler Press Limited.
- Booth, Stephan, 1978. *Shakespeare's Sonnets*. (Revised Edition) Yale University Press.
- , 2007. "The Value of the sonnets" In Schoenfeldt (2007) pp. 15-26.
- Burrow, Colin ed., 2002. *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford University Press.
- , 2007. "Editing the Sonnets" In Schoenfeldt (2007) pp. 145-162.
- Duncan-Jones, Katherine, ed., 1997. *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.
- Friedrich, Otto, 1985. "Shall I Die? Shall I Fly...: A US scholar claims discovery of a poem by Shakespeare," *Time Magazine*. December 9, 1985, p. 34.
- Gollancz, Israel, 1919. *Shakespeare's Sonnets* (Temple Shakespeare). J. M. Dent.
- Poole, Joshua, 1657. *The English Parnassus*. The Facsimile Reprint. (1972) Scoler Press Limited.
- Post, Jonathan F. S., 2017. *Shakespeare's Sonnets and Poems* (A Very Short Introduction). Oxford University Press.
- Rubinstein, Frankie, 1989. *Shakespeare's Sexual Puns and Their Significance*. (Second Edition) Macmillan.
- Schoenfeldt, Michael, ed., 2007. *A Companion to Shakespeare's Sonnets*. Blackwell.
- Taylor, Gary, 1985. "Some Manuscripts of Shakespeare's Sonnets." *Bulletin of the John Rylands Library*. 68, pp.210-46.
- Tilly, Morris Palmer, 1950. *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*. University of Michigan Press.
- Vendler, Helen, 1997. *The Art of Shakespeare's Sonnet*. Harvard University Press.
- , 2007. "Formal Pleasure in the Sonnets" In Schoenfeldt (2007) pp. 27-44.
- Wilson, John Dover, 1966. *The Sonnets*. Cambridge University Press.
- Wyld, Henry Cecil, 1923. *Studies in English Rhymes from Surry to Pope*. Russell and Russell.
- 大場建治編注訳. 2018. 『ソネット詩集』(研究社シェイクスピア全集別巻) 東京: 研究社.
- 大森文子 2018a. 「喜びと悲しみのメタファー: Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.
- 2018b. 「人の心と空模様: シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1』(鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編) 東京: ひつじ書房、175-104.
- 川西進編 1971. 『*Shakespeare's Sonnets*』 鶴見書店.
- 櫻井正一郎 1979. 『結句有情—英国ルネサンス期ソネット論—』 京都: 山口書店.
- 高松雄一訳 1986. 『ソネット集』 岩波文庫.
- 柴田稔彦編 2004. 『対訳 シェイクスピア詩集 イギリス詩人選 (1)』 岩波文庫.
- 中西信太郎訳 1976. 『ソネット集』 英宝社.
- 藤澤博康 2012. 「『ソネット集』における嗅覚」『英語英文學研究』 広島大学英文学会 pp. 27-38.
- 嶺卓二編注 1974. *Sonnets by William Shakespeare*. 東京: 研究社.
- 吉田健一訳 2007. 『シェイクスピア/シェイクスピア詩集』 東京: 平凡社.
- 吉田秀夫生訳 2008. 『シェイクスピアの「ソネット集」』 南雲堂.
- 渡辺秀樹 2004. 「人名のメタファー研究序章 シェイクスピア劇の登場人物名に由来する *OED2* の見出し語と用例考察」『メタファー研究の方法と射程 (言語文化共同研究プロジェクト 2003)』 (大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科 23-33.
- 2019. 「英詩感情語メタファーの系譜第 2 回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考: 感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション (言語文化共同研究プロジェクト 2018)』 (大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科 1-10.